

滑稽の構造

田河水泡



講談社

滑稽の構造

田河水泡



講談社

滑稽の構造

定価一八〇〇円

昭和五十六年八月十日 第一刷発行

昭和五十六年十一月十日 第二刷発行

著者 ● 田河水泡

発行者 ● 加藤勝久

発行所 ● 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号 一一二

電話・東京(〇三)九四五一一(大代表)

振替・東京八二三九三〇

レイアウト ● 志賀エディトリアルデザイン

印刷所 ● 株式会社廣済堂

製本所 ● 黒柳製本株式会社

©田河水泡 昭和五十六年 printed in Japan
カバー絵 田河水泡

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。



目次

まえがき

1

滑稽作品の収集

1

滑稽は論理の誤り

3

滑稽は心理的感情

5

やっぱり滑稽は論理で分類

6

第一部

序説

11

概念の話

11

本質による概念の種類

12

A 同一概念と不同一概念

13

5	比喩の誤り	26
4	語義解釈	26
3	多語一義	25
2	一文多義	25
1	一語多義	24
	言語的誤り	24
	方法の誤り	23
	絶対的概念と相対的概念	22
	矛盾概念と反対概念	21
	F 対象概念と属性概念	19
	E 抽象的概念と具体的概念	18
	D 単純概念と複合概念	17
	C 積極的概念と消極的概念	16
	B 同類概念と異類概念	15

内容的誤り
28

6 結合の誤り
28

7 分離の誤り
29

8 一般特殊の誤り
29

9 特殊一般
30

10 特殊特殊
31

資料的誤り
32

11 不当観察
32

12 不当実験
34

13 不当因果
34

14 不当定義
36

15 不当分類
36

論証の誤り
37

16 不当仮定
38

17 複問の誤り
39

第二部

18 論点変更の誤り | 39

19 論点仮託の誤り | 41

20 論証不足の誤り | 43

方法の誤り一覧 | 46

例題漫画 | 51

A 同一不同 | 51

B 同類異類 | 75

C 積極消極 | 102

D 単純複合 | 136

E 抽象具体 | 158

F 対象属性 | 191

第三部

例題笑話

223

A 同一不同一

223

B 同類異類

232

C 積極消極

241

D 單純複合

247

E 抽象具体

252

F 対象属性

261

引用咄本一覽

274

あとがき

275

まえがき

この本は滑稽作品の収集にはじまり、それを分類する必要から滑稽の構造を探る破目になって、苦心慘澹した結果ようやくコレクションの分類整理ができましたという研究報告みたいなものです。しかし研究報告というものは何んの場合でも退屈なものです、幸いに多くの漫画家の協力を得て優れた作品の提供をうけたので、その作品の紹介を兼ねて分類の例題としました。

そのおかげでこの本は解説付き漫画集として笑話と合せて十分に滑稽の快感を楽しんで頂けるものになったと思います。

先ず順序として滑稽作品の収集から話をはじめましょう。

滑稽作品の収集

私は、面白いと思う笑話があるとノートに書止めたり、面白い漫画をみると切抜いてそれらを溜めて楽しむことを続けてきました。

初めは集めて溜めてそれをどうするという目的はなかったのですが、私は滑稽を創る職業にたず

さわっている者として、一般の人のようにちらりと見ただけで捨てるようでは滑稽という概念を粗末にすることになるので、これを集めようという気になったのです。

作者が一点の小品を創るにもさんざん頭を搾^{しぼ}って生み出すのですからその精進^{しょうじん}を思うと捨てる忘れるでは済まないと思うのです。とはいってもおびただしい刊行物の中から私の目にふれるのは九牛の一毛にも及ばないほんの僅^{わずか}かなものですが、それでもその中から面白いと思うものに出会うとそれをコレクションに加えているうちに、だんだん量^{かさば}張^ばつてきて、何んとかしなければということになってきました。

収集とは量的にただたくさん集めればいいというものではなく、体系的な分類整理が伴わなければ収集の意味がないと聞いています。

そこでコレクションを整理したいという願いが起ころのですが、それには滑稽がどんな構造で組立てられているかを知らなければ分類のめどが立ちません。

これを大別すればコミックとナンセンスですが、それだけでは整理がつかないから更に細別するために、滑稽の分類法というような便利な本があればと探しても、そんな本はないので、そこで諦^{あきら}めちまえば後で苦労しなくても済んだのでした。

しかし顧みれば、私は滑稽を創^{つく}ることで生涯を生きてこられたのですから、一般が滑稽を軽んじていることに同調して、滑稽とは他愛もないことだ、などといって済ましては滑稽さんに申訳ない、と妙なところで義憤を感じて、滑稽の構造を調べてみようという気になったものです。

滑稽は論理の誤り

かねてから滑稽は論理の誤りだということとはたびたび聞いていました。

そこで論理がどう誤れば滑稽になるのか、論理学を読めばその構造が分かるだろうと思って、古本屋の哲学書という棚から論理学の本をみつけてきて、どこかに滑稽という文字があつたらそこを手がかりにしようとバラバラめくつてみても、滑稽だのおかしいだのという言葉は一言半句もみつからないので先ずがっかりしました。

私は大学いもは食つたことはあるけれども大学なんか行つたこともないので、論理学のろの字も知らない、学問の門外漢です。

それが難解な論理学と取組んでみる氣になつたのは大それたことだと思ふけれども、必要がそうさせるのですからともかく読みはじめてみると「論理学とは正しい思考作用の形式を研究し、且つこの形式によつて科学的知識を獲得し、これを組織する一般的方法を論ずる科学である」と定義していることから始まって「論理学の対象は思考作用である」と規定し、更に「思考には正しい思考と正しからざる思考とがある。前者は真なる思考であり後者は偽なる思考である。心理学では思考の真偽を問題とせず思考の働きを研究するが、論理学では常に正しい思考、即ち真なる思考のみを研究対象とする」と規定しています。

まだあります。「論理の誤りは虚偽であり、虚偽は科学の対象にならない」とここできびしく論理の誤りをこきおろしています。

そうなると論理の誤りである滑稽は、正しからざる思考に属して虚偽として論理学から切捨てられ、虚偽は科学の対象にならないとして論理学者からは見限られていることになります。

これでは滑稽はごみ溜ごみづみに捨てられた屑くずのようなもので、そのうえ誤りだ、不正だ、虚偽だ、とまるで悪ものでもあるかのように扱われたのでは浮ぶ瀬もありません。

学者は真理の探究はするが虚偽の追求はしない、といつても論理学を読んでみると論理の誤りになる例は随所にあります。

すべての動物には理性がない

すべての人は動物である

故にすべての人には理性がない

これは論理を誤っているから滑稽だといえるのに、論理学ではこれを四個概念の誤謬ごりゆといつて滑稽とはいわないのです。

そのほかにも論理の矛盾によつて起こる誤りが滑稽になる例がたくさんありますが、それらも概念不周延の誤謬、両前提否定の誤謬、両前提特称の誤謬などと呼んで滑稽とはいわないけれども、滑稽になる例を幾つも取上げているではないか、どうして四角張った学術用語ばかり並べたがるんだらう、ほんとにつき合いくいつたらありやしねえ、とやけっぱちなつてSがPなら胡瓜きゅうりはカッ

バダなどとチャカして読むからますますちがあきません。

飽きあきして放り出したり、また気が向いて読み直したりしていると、或る日ハッと気がついたように論理学が滑稽という用語を用いないわけがやっと分かりました。

滑稽は心理的感情

心理学では思考の真偽を問題とせず、思考の働きを研究するが、論理学では常に正しい思考、即ち真なる思考のみを研究対象とする、とはじめに述べたように、論理学は感情を働かせてはならないので、滑稽という感情を伴う言葉を用いないのでした。

そんなことは始めから分りきったことですが、そこが独学の徒の弱点で、頭が論理学にこびりついていると何んでもそれで決めようとする観念から離れないので、感情が働けば心理学の分野だということに頭が回転しなかったのです。

それでは滑稽は心理学に属するものならば、心理学で分類できるかとなると、これがまた厄介なことに感情は主観で動くから、或る人があおかしいと快感を覚えても、他の人には何んだくだらないと不快感を与える場合もあるし、突発的に出た洒落しやれが非常におかしく感じて、二度繰返されると陳腐になって快感が減少することなどわれわれがよく経験することです。

そのように一定の法則を決めることができないので、滑稽を心理学で分類することは先ず困難な

ことだろうと思います。

やっぱり滑稽は論理で分類

ドイツの有名な哲学者リップス（一八五〇—一九二四）も、滑稽とは論理的価値の生滅にある、といっています。これほどの大家がそういうのですから間違いないでしょう。

そこで再び論理学に戻って論理がどう誤れば滑稽になるのかについて考えてみることにしました。論理学には原理論と方法論とがあつて、原理論では初めに概念があり、概念が発展して判断となり、判断が発展して推理となるとあります。

その間にはややこしい規則がありますが、初めにも述べたように論理の誤りは虚偽であり、虚偽は科学の対象にならないと論理学から突っぱねられているので、滑稽を分類してもこれは科学でも学問でもないと思われればこつちも気がらくですから、学問的な規則は無視して概念だけに焦点を当ててみることにしました。

初めの概念に誤りがあれば判断も推理も誤るのだから先ず概念だと見当をつけたのが当つて、ここに手がかりを把むことができました。

この概念の誤りが滑稽の生じる元になつていて、同時に方法の誤りが複合されていて、必ず二重構造になつて現われます。

このことは例題集の解説を読んでみればすぐ分ります。

ですから方法の誤りは後から組合わせるのではなく、滑稽作品の中から発見するものなのです。しかしこれは省略しても二十項目もあるので、これを誤りなく分類するには多少の慣れが必要でしょう。

私はそのやり方は考えたものの、分類には慣れていないので、かなりいい加減に押つけたものもないとはいえません。その点はお容赦のうえ誤りをみついたら訂正しておいてください。

例題集の作品は、落語のように長いものは滑稽の部分を探り、笑話は行数の少ないもの、漫画は四コマ乃至一コマとなるべく短かくて現代活躍中の作者のものを選びました。

笑話に江戸小ばなしが多いのは、二百年を越える江戸時代に既にあらかたの滑稽の型が創られていたことを示したためで、参考のため巻末に嚆本の創作年代表を添えておきました。

最後に用語のことですが、これは学問ではないのだから論理学の用語を避けて、もっと平易な日常語に置き替えたいと、いろいろ工夫してみたのですが、これはだめだったので、不本意ながら論理学の用語をそのまま借用することにしました。學術用語を使っていると科学性があるように錯覚しますが、これは当初に述べたようにコレクションの分類整理のための趣味的便法に過ぎません。多少の判断の誤りがあっても乱雑が整理されればそれだけでも気分がいいものです。

いろいろな型の変った作品を集めて観賞し、滑稽の快感を楽しむことが収集の目的ですから、むしろかしく考えずに気らくにやるつもりですが、何せ相手が論理学だからやっぱり骨が折れました。

第一部 序說